

「生活」という語で我々は何を捉えたいのか、 何が捉えられるのか ——初日の各発表へのコメントとして

田村 和彦
TAMURA Kazuhiko

1. 「生活」の前景—1900年前後の華英/英華辞典を事例として

日本民俗学会主催の国際シンポジウム「何気ない日常/変わりゆく日常」初日に掲げられたテーマであり、基調講演、問題設定、そして各発表に共通する鍵概念は、生活の変化と生活改善であった。ここでいう「生活」とは、どのような内実をもち、民俗学はこの概念を積極的に使用することでどのような可能性を切り開くことができるのか。この問題を踏まえて各発表にコメントするために、まずはやや迂遠な方法ながら、この概念のたどってきた道のりを簡単に整理することから始めた。この方法によって、本日の諸発表およびこのシンポジウムの性格をより顕著にすることができる、と考えるからである¹。

日本における「生活」という言葉の発生と展開、そこで企図された質的把握への転換については、すでに岩本の指摘があるが、この語彙は、中国においても、近代以前の言語空間において、今日の我々がすぐに想像するような内容を自明なものとして含みこんだ言葉ではなかった〔岩本2009、2011〕。まずは、この不整合を素描することから始めたい。

はじめに、中国語がその他の言語へと盛んに翻訳される必要に迫られた、1900年前後の華英/英華辞典を手掛かりに、この問題を考えてゆく。

1892年に刊行された、のちのケンブリッジ大学中国学教授であるHerbert Allen Gilesによる著名な『Chinese-English Dictionary』によると、中国語の「生」とは、To bear; to bring forth; to produce; to beget. To be bornであり、この意味においては「滅」「没」や「死」「剋」の反意語となる。また、Raw, fresh; Barbarous; unfamiliar, unacquainted withの意味もあり、この意味においては「熟」の反意語である。そのほかに、to be alive; living; lifeの意味でも用いられ、その具体例として、「生理、生活、生業、生涯」が挙げられており、これらの中国語に対応する意味として、Occupationやlivelihoodが列挙されるが、特に2番目、すなわち「生活」については to make a livingをも意味する、と解説している〔Giles 1892 (1912)〕²。今日の「生活」の意味に近い内包が指摘される一方で、全体としては「生きるための手段」といったニュアンスが強い。

近現代中国における印刷出版技術の発展に大きな貢献をなしたthe American Presbyterian Mission Press（美華書館）が、1905年に発行したP.Poletti著の『A Chinese and English Dictionary』は、漢字一字ごとの説明が中心であり、熟語の用例はほぼないが、「生」は、to produce; to bear; life; unripe; new; unpolished; raw; to arise, to grow, to begetと解説されており、今日の「生活」を想起させるlife（これも前後して出版された辞典の用例からは、「生きていること」

を指し示すものかもしれないが)はそこごく一部にすぎず、多様な「生」の内包のうち、決してとくに優位なものではない[Poletti 1905]。

前述の辞典が西欧人の手になるものであったので、次に、中国の学者による翻訳の事例を挙げてみたい。1929年に出版された『A Complete Chinese-English Dictionary』は、O.Z.Tsangの編纂による華英辞典だが、Tsangは、当時「中国のハーバード大学」として著名で、教会系大学の雄として多くの知識人を輩出したSt.John's University (聖ヨハネ大学)の正規翻訳教員であった。彼の編纂したこの辞典でも「生活」に関する項目は、「生活or生計or生涯」であり、その対訳は「Living; livelihood; Way of life; occupation」になっている[Tsang 1929]。一見、今日の「生活」に近似した説明が含まれるように見えるが、置換可能な語彙から確認できるように、ここでは「生きていること」、「生存」のほか、「生きてゆく術」あるいはその具体的な表現(職業)がその含意の中心である。この辞典では、その一部に「生活程度:the standard of living」といった今日でも通用する「生活」概念の拡大がみられるのだが、同時に「Biodynamics」の訳語として「生活機能学」を充てるなど、まだ、生物学的に生存としての「生活」、すなわち、「生き」て「活きる」様態を指し示す概念でもあった。

以下では逆に、今日の「生活」と訳せそうな英語による概念をどのように中国語化しているのか、という視点から事例を取り上げる。

先の言語の検討で現れた、「生活」に充てられていた説明のうち、今日の用法に近しいと思われるlifeおよびlivingの語彙に注目すると、1905年に成立した『English-Chinese Dictionary of standard Chinese Spoken Language <官話> and Handbook of Translation』では、以下のような説明を施している[Hemeling 1916]。

Lifeとは、「性命、生、生命、命、活命、在世之時間、終身、一生、一輩子」であり、「Manner of living」として「過日子的様式、行為、挙動、品行、世路、平生的境遇、力、気力、精力」を挙げる。High lifeの訳語に「高等生活」が見えるものの、基本的には「生活、生機、生氣」と訳され得る言葉は「Animation」であり、この項目における今日の「生活」として最も近い訳語は、Not a daily necessity of lifeの訳語「非民生日用所必需」の「民生」であろう³。なお、Standard of livingの訳語として「生活程度、生事標準、国民生計階級」がみられる。この訳語を巡る知的背景は、後述する陶孟和らの研究へと展開してゆく。

関連する語句についても同様であって、Livelihoodの意味には「養廉、養贍、營生、生活之計、生計、養生之計、生涯」といった概念が当てられ、to get a livelihoodは「過日子、度日、糊口、生活、營生」として説明されている。同じく、Living alive は「活的、活著、活、生活」であり、Living (livelihood)の意味には「養廉、營生、生活之計、養生之計、生計、生涯」が該当する、とされる。

この辞典でも、やはり、「生活」とは概ね、生きているという状況を示し、当時の意味での「生理」や「生涯」と同一の範疇の言葉として、生きてゆくための収入や職業、その術といった意味合いで使用されている、といえる。

次に、1900年前後の英語/中国語の辞典に現れた意味と現代における意味の不一致を、近年編纂された古語辞典から検証する。古典期における語彙の意味を解説した『近代漢語詞典』によれば、「生活」とは「工作、活計」や「物件、物品」の意味であり、前者について『独角牛』や『金瓶梅詞話』の事例を挙げているが、これらはどちらも生計、生業に関する事例である[許(主編)1997]。類似の趣旨で編纂された『漢字古今義合解字典』では、「生」の字義について、「①成出、生長、②人的出生、生育、③產生、發生、④活着、生存、⑤生産、⑥生計、生活、⑦生命、⑧一生、卒生」としており、6番目に「生活」の語が見えるが、「生計」と同一の範疇になっている[許・陳(主編)2002]。実際、

⑦の用法の解説として、『捕蛇者説』の「而郷隣之生日蹙、殫其地之出、竭其廬之入、号呼而転徙、饑渴而頓首?」の「生」がそれに該当するとしているが、今日的な「生活」の内包としては、同じテキストのなかでも、むしろ後半の「故為之説、以俟夫觀人風者得焉」の「人風」のほうが近いように思われる。

以上、1900年前後の英華辞典および古典中国語に関する辞典をもとにした簡単な検討からは、当時の「生活」という概念が、今日的な「生活」とは異なる意味、少なくとも例えば『The Oxford Chinese Dictionary』(2010)に記述される、「生活」で始まる18の翻訳語(例えば生活必需品=daily necessities、生活方式=way of life、生活条件=living conditions、生活作風=conduct)などの含意とは大きくずれる形で用いられていたことが確認できる。この問題は、極めて重要なながら、例えば中国の近現代における輸入語彙を扱った古典的名著である『現代漢語外来詞研究』[高・劉 1958]などでも見過ごされてきた。「生活」という当たり前にすぎる言葉故の処遇かもしれないが、まさに、この点こそ、ここでのコメントの立脚点、すなわち、我々はどうのように概念を変遷させ、ある意味で「冒険」させて、何を考察の対象としようとしてきたのか、を再考すべきであるという主張と結びつくわけだが、まずは以上の確認を経たうえで、この概念の用法の拡張、変遷がどのように起こったのか、について論を進めよう。

2. 「生活」概念の「冒険」

「生活」の概念の用法の拡張、変遷を知るための手がかりとして、ここでは、Harvard-Yenching 研究所に収められた中華民国期の書籍を整理した目録『美国哈佛大学哈佛燕京圖書館藏民國時期圖書總目』[龍 2010]を資料として使用する。

同書の、民俗学、人類学、社会学に関係が深い「社会科学類」に記載されている書籍のうち、「生活」の語彙が含まれている作品33点を時代順に列举すると、興味深い傾向を指摘できる。

最初期の1928年には、『馬來半島土人之生活』、『中国婦女生活史』といった、ある意味で今日の「生活」に部分的に近しい意味での使用が現れるものの、それらはすぐに姿を消し、1930年から32年にかけては、『北平生活費之分析』や『上海工人生活程度的一個研究』など、後述する陶孟和らに関係する著作にとってかわる。この時期の「生活」とは、欧米の理論、社会実践的影響のもとで、中国語元来の「生計」に近く、それでいて数量的な把握の可能な概念の面が強調されたものである。しかし、1934年に国民党政府によって新生活運動が開始されると、「社会科学類」項目のすべての「生活」という語を含む書籍は、この政治運動に関する書籍一色となり、この傾向は1939年まで続く。この運動が日本の「生活」概念の影響を受けていたことはよく知られるが、ここからは、『農民的新生活』、『児童的新生活』、『婦女的新生活』、『文芸家の新生活』など、すべての人々を政治運動としての新生活運動に取り込むことが企図されていた様子が浮かび上がる。上述の書籍の出版社が南京正中書局であり、それぞれの著者や編集者の経歴からは、まぎれもなく、ここで提示されるこの時期の「生活」が新生活運動のそれであって、それ以外ではありえないことを示している。

同研究所所蔵の書籍のうち、文頭に「生活」を冠する書籍を整理すると、1928年に出版された生物学のテキスト『生活進化史ABC』が嚆矢であり、1934年には陶行知の校訂による『生活的書』(汪達之著)などの社会運動として、また知と実践の融合形態として重要な書籍も登場する。しかし、新生活運動の時期に急増する「社会科学類」とは違って、1940年代までは、全体的には出版量は少

ない。1940年代になると、1941年の林語堂の『生活的芸術』（原著は“The Importance of Living” [1937]、邦訳は阪本勝訳『生活の発見』 [1952]。現在の邦題は『人生をいかに生きるか』へと変更されている）の翻訳出版のころから、理想的な人生の送り方指南といった書籍が増え始める。燕京研究所蔵書の目録に見られる林語堂の“The Importance of Living”の中国語訳は、黄嘉徳訳、西風社出版になる書籍だが、ほぼ同時期に異なる訳者によっても中国語訳が出版されている。興味深いことに、訳者が異なるにもかかわらず、いずれも、Artの訳語を検討吟味した同時代の中国知識人の知的前提に立って、周作人の提唱した「生活之芸術」を彷彿とさせる『生活的芸術』という翻訳を採用している。いずれにせよ、この時期には「生活」は、「智慧」、「思想」、「体験」、「幸福」と結びつく言葉として普及し、その意味するところは、先に検討した1900年前後の華英辞典の言葉を敷衍すれば、継続する生存、生涯の、人生という方向への拡張が図られていた、といえる。林語堂に大きな影響を与えたことで知られる民俗学者の周作人は、すでに1920年代からこの意味での「生活」を論じており、その意味では、民俗学はより早くこの言葉を学問領域の中心概念として思索を進める条件を持ちつつも、それを逸した、と言うこともできよう。

3. 「生活」と「社会調査」—改善対象としての「生活」

コメントのための予備作業の最後に、中華民国期に現れた新たな意味での「生活」と、それを「調査」するまなざしとの関係について触れておきたい。中国社会学において、最初期の系統だった社会調査は、1914年に実施された『關於北京302個人力車夫生活情形』とされており、すでにその最初期から「生活」が対象として設定されていたことが確認できる。この調査は、キリスト教系大学を中心に、「社会問題」を解決する輸入学問として相次いで開設された社会学の教員であるJohn S. Burgessの指導のもとでStudent Social Service Club（社会実進会）が実施したものだ。この調査に参加し、その後イギリスで学んだ陶孟和は、梁宇皋とともに、当時のイギリス社会学で隆盛した都市貧困層の研究動向と重ね合わせる形で中国の農村と都市の「生活」についての博士論文をまとめている（Leong, Y.K. & Tao, L.K. "Village and Town Life in China" [1915]、陶孟和・梁宇皋『中国的鄉村與城鎮生活』）。陶孟和は、帰国後は社会調査所の所長に赴任し、多くの調査に携わった。この、「調査」される対象としての「生活」とは、多くの場合都市のなかで新たに誕生した階層である下層労働者の収入や支出を中心としており、陶孟和本人による、『北平生活費之分析』 [1926]、同じく社会調査所の楊西孟による『上海工人生活程度的一個研究』 [1930]、上海市社会局から出された劉宝衡による『上海市人力車夫生活狀況調查報告書』 [1934]、金陵大学農学院の楊蔚による『成都市生活費之研究』 [1940]といった研究が展開していった。この「生活」へのまなざしは、人々を統治する組織にも共有され、「全国工人生活及工業生産調査統計報告書」 [工商部 1929]、「全国工人生活及工業生産調査統計総報告」 [工商部 1930]、袁昂、呉永成による「中大工人生活調査」 [1931]、賈銘の「鉄路工人生活調査」 [1933]などの調査を生み出してゆく（ここに挙げた調査報告の一部は、[李ほか 2004]に再録されている）。

また、この時期の中国社会学には、「生活」を取り上げた、もう一人の重要な人物がいる。Sidney Gambleは、Burgessと同じく、キリスト教系大学を通じて中国へ社会学を導入するにあたって重要な役割を果たした人物だが、ここでも、同種の、特定の視座に立った、「生活」・「調査」の強い結びつきがみられる（同時期の中国における社会学の調査活動については、[閻 2004]が詳しい）。Gambleは、主に北京での調査を組織しており、先述のBurgessがアシストし、the

Princeton University Centerとthe Peking Young Men's Christian Associationが後援した調査である『Peking: A Social Survey』[Gamble 1921]、エンゲル係数など当時の最新理論を用いた「二十五来北京之物価工資及生活程度」[孟天培・Gamble 1925、1926] (平野正雄訳『北京に於ける二十五箇年(自1900年至1924年)の物価・工資・生活程度』1942年)、『Peking Wages』[1929]などで知られる。興味深いことに、Gambleの代表作である『How Chinese families live in Peiping; a study of the income and expenditure of 283 Chinese families receiving from \$8 to \$550 silver per month』[Gamble 1933]は、中国では直訳的に『北平的中国家庭是怎样過活的』、あるいは『北平的中国家庭是怎样生活的』と訳されるが、これは変遷しつつある「生活」概念の揺らぎを示している。この書籍は、日本では、1940年に福武直により『北京の支那家族生活』として翻訳されているが、本書は一部に冠婚葬祭や衣類の記述なども含むものの、副題が示す通り、北京の283世帯の収入と支出、預金を調査分析した経済的関心に基づく調査結果であり、包括的な、今日の意味での「生活」そのものではない⁴。ここにも「生活」概念の揺らぎが現れている。

いずれにせよ、1920年代から30年代に展開された中国語における「生活」概念として用いられた一つの含意とは、当時の社会「問題」とされた(当時の社会学の主要なテーマの一つが犯罪であったことをここで思い出してもよい)都市部を中心とする下層労働者への経済的関心や、当時流行した生活費調査であって、陶孟和やGambleの報告が示すように、今日的な意味では「生計」と呼ぶべき問題意識を中心としていた。この時期の「生活」のある側面は、中国独自の社会学の建設に尽力するなかで異なる社会調査の形態を形成していった呉文藻の指摘である、「社会調査の源は、フランスのFrederic le Playがおこなった、労働者の生活の形成した多くの家計簿の現地考察に遡る」[呉 1935]の直接的延長上に位置していたといえる。

ここで展開された「生活」概念と、今回のシンポジウムにおけるそれとは、改善が求められるという点で一致するが、「生活」そのものの把握のあり方においては直接的に結びつかない。その最も大きな理由として、上記の拡張された「生活」概念は、数量的な把握が可能な対象であるのに対し、今日の発表に緩やかに共通する「生活」とは、そこから零れ落ちるものへの強い関心を示しているように思われるからである。換言すれば、我々の今日的関心は、無数の可能な過去のあり方を意識的無意識的に選択しつつも過去に拘束され、ありうる様々な未来へとつながる現在という瞬く間に過ぎ去るが絶対的な地平から、何を、どのように感じ、考え、自己とその繋がりを統合し、意味づけているのか、すなわち、「生きているか/生きてきたのか」へと向かっているのではないだろうか。そして、そのために、史料と並んで、記憶や語り、身体技法といったあり方を方法論の中心に位置づけようとしてきたのではなからうか。いずれにせよ、ここまで、中国の事例から、「生活」という一見ごく自明に見える概念が、各時期に、それぞれの論者の関心によって変遷、転換してきた様子を素描した。その結果をごく簡単にまとめれば、「生存」、「生きている」ことそのものから、生きてゆく糧、糊口をしのぐ生業といった意味合いの方向へと拡張され、一部では収入支出を中心とする数値的に計測可能な対象になり、他方では継続して生きていることという意味から、人生訓や日々の過ごし方への啓蒙へと、またある一時期には、起居や礼儀、交際や近代的時間や金銭使用などのあり方への政治的介入として現れたことを確認した。このように、「生活」とは、揺らぎを伴いつつ、それぞれの一時期に形成されたある種のパースペクティブとして理解することができる。

4. 「生活」の改善、向上運動をめぐる： 行政的断片化、運動の主体、そして個人化

今回のシンポジウムが「生活」の改善に関する運動をテーマとしていたことから、先生方のご発表に共通する事項として、相互に関係する1) 行政による運動における「生活」の断片化と、2) 運動の主体性、その展開の一つとしての3) 「生活」の個人化を挙げることができよう。これらは、近過去の現象としての生活の改善に関する研究を超えて、今後の民俗学を展望するうえでも重要な問題であろう。

まず、行政的なアプローチから「生活」を改善しようとすれば、その具体的な対象の問題化、とりうる改善措置と成果の確認という必要性から、しばしば「生活」は断片化される。田中先生の基調講演にあるように、そこでいう「生活」の改善とは、具体的には竈や台所、風呂場の改善や蠅や蚊の駆除であったり、南先生のご発表にあるように、あらゆるものがセマウルづくりであったとしても、住宅改良や下水溝、共同堆肥場設置など、いくつかの典型的で具体的な焦点が存在する。このことは、それが現在の「生活」を改善する、あるいは「新たな生活」を手に入れるために、切実な必要をもってなされた措置であるが、運動の具体的な対象が「生活」そのものではなく、いわば提喩的關係として理解されることを意味する。これらの、あたかも「生活」の部分として理解される断片の改良は、間違いなく現在の我々のあり方を規定してきたが、運動のなかで改良されたこれらの断片と生活は、単なる部分と全体の関係ではなく、ここでの改良項目すべて合わせても、今日的意味での「生活」そのものを再構成することはできない。「生活」を把握するためには、細部に断片化した項目を列挙してゆくのではなく、主観的な感覚を含む、関係性へと着目するような認識の転換が求められるはずだが、「生活」という言葉そのものが、上述の検討でみたように、何らかの問題を対象化するために変遷を経ながら展開してきた概念であることを忘却し、民俗学の重要な概念として洗練させてこなかった。ここに生まれた思考的空白から、民俗学では、ごく少数の研究を除いて(例えば[田中2011]など)、眼前で展開し我々の生活を大きく変えたこの運動を十分に考察してこなかったのではなからうか。その結果、行政による運動としての「生活」の改善に対して一定の評価を下しつつも、その「生活」の総体性を喚起し続ける、というフィールドワークに基づく研究活動のもつ可能性を十分に発揮することができなかった。

為政者による、運動としての「生活」へのまなざしは、実際の「生活」の現場には、その総体性を解体され、具体的な「改善」を要する項目となって降りてくることを確認したが、二つ目の緩やかに共通する問題は、運動の主体性に関するものである。南先生のご論考が鋭く指摘するように、主体性への着目は、「生活」の刷新を目指した運動の理解について極めて重要な視点を提供する⁵。

レベルは異なるが主体性概念に注目すれば、例えば、田中先生がご講演で指摘された、生活改良普及員が地域の若い主婦らの力を組織し、住民が主体的に改善すべき問題を発見し、解決を図る条件を整備してゆく手法を採用したこと、戦後の新生活運動協会が、それ以前の政府主導で行われた一連の運動と異なり、自主的に改善してゆくことを支援することで成果を挙げたという指摘にも、この問題が現れている。小島先生のご発表の、行政側の記録である「広報誌」を用いる運動理解と、運動の経験者を対象とする「聞き書き」によるその差異、また、南先生による、セマウル運動初期のセメント配布の事例、周先生による、観光や体面、国民生活の向上といった為政者の言説と、人々の都市的生活の体験などが複合するなかでの主体性の議論もまた、同様の文脈を共有している。しかし、今回、この問題をもっとも正面から扱った発表は、山中先生のご論考であろう。この発表は、お互いに交流を持ちつつも異なる2つの地域の事例から、「蚊とハエのい

ない生活」という同一の運動であっても、生活上の問題を「誰が」どのようにとらえ、どのような方法で解決へと導くのかによって、その後の展開が全く異なる問題を描き出している。ここで得られた知見を、先に見出した共通項である運動的把握による生活の断片化と関連付ければ、次のように展開できるだろう。行政の指導による運動としての生活改善においては、参加主体はそれぞれレベルの異なるエージェントとして関与し、断片化した当該項目の改善とともに活動を終息させるが、そこで生活を営む人々による、自らの生活を向上させるためのアクターとしての参加においては、改善は常に継続してゆく。この主体性のあり方に、民俗学はどのようにかかわることができるのだろうか。こうした問題群は、具体的な研究対象を超えて検討する必要があるが、今日のテーマである「生活」は、その多岐にわたる内包(とその内包の可変性)によって強い喚起力を持ち得る。

今日の諸発表は、周論文を除いて、基本的に過去に発生した「生活」を改善する、あるいは「新しい生活」を創造する運動を対象としている。他方で、現在では、生活改善運動やセマウル運動のような、全国民を巻き込む大規模な運動は下火となり、「生活」を向上させる試みは、とりわけ韓国や日本では個人の手ゆだねられる傾向があるのではないだろうか。もしそうだとすれば、こうした個人化する生活の向上のための実践を、民俗学はどのように捉えることができるのだろうか。

周先生が提起されたトイレ革命の事例が示すように、トイレという一見、極めて個人的な現象であっても、その形成は、それを取り巻くインフラ整備や専門の設備といった条件や環境、技術が絡み合う複雑な前提の下で可能となる。こうした我々の生存環境を形成している「世界」を詳細に考察し、内省の起点を創造してゆくという方向性を模索することは、重要である。その際に、強調すべきことは、民俗学の中心的手法、すなわち「聞き書き」を通じて現出する主観的事実から現象を捉えなおすという手法の重要性であろう。そこには、行政的な断片化を経た「生活」把握、また、先述の、暗黙裡に「調査者」と「非調査者」の分断を自明の前提とした「社会調査」における「生活」把握とは異なる、新たな理解をもたらす可能性がある。

また、たとえ「生活」の継続的構築が個人化したとしても、すべてが、個人による完全な創造性に委ねられることはありえない。とすれば、トップダウン型であれ、ボトムアップ型であれ、「生活」を継続的に構築してゆくための、モデルや知識、経験を取得し、解釈する経路が確保されなければならない。この、個人化し、アクターとしての役割を求められる一方で、モデルや知識、経験を必要とする状況は、一見矛盾するようだが、人々の再度の「繋がり」を要求することとなる。ここに、よりよい未来を目指す、あるいは、現在の問題を解決するためにその変遷を紐解くという現在の地平に於いて、人々の結節点のひとつとして、過去の生活「感覚」経験を蓄積してきた成果および現在進められているフィールドワークに基づく成果をある種のアーカイブとして活用する可能性がある。このアーカイブの、個人化された人々を再び結節する機能は、たとえ過去の運動を核とするアーカイブであっても、同時代に水平的な方向でも作用する。なぜならば、そのアーカイブを利用するために集う人々は、現在という地平においてそれをおこなうからである。以前から民俗学が重視してきた対面的状況であれ、近年発達が顕著なSNSに代表されるような非対面的な関係性であれ、個人化された人々がそれぞれに生の質的向上を願って枝を伸ばす先の核の一つとして、「生活」に関するアーカイブを位置づけることができるのであれば、人々はすでに孤立した断片ではなく、可変的なネットワークのなかに緩やかに回収され、同時にネットワークを形成してゆく重要な枝たり得る。こうした、現在からみて常に発芽する可能性を秘めた、知識と実践の結節点を社会的に配置してゆくことは、今後の、民俗学がどのように社会とかかわりあうか、という問題系に一つの方向性を与えるものと考えられる。

5. 結びに代えて

以上、時代や対象はそれぞれに異なりつつも、「生活」とその改善をテーマとした今回の発表から見出しうる問題を指摘した。最後に以下の点を確認して、コメントを閉じることとしたい。

本稿は、すべての発表に共通する「生活」という概念が指し示す内容が、歴史的に変遷を経てきたこと、そして、それぞれの時代、知的背景の中で、人々はこの概念を「冒険」させることで何をとらえようとしてきたのかについて、素描した。民俗学は、「生活」概念を十分に検討し、生の向上、改善運動についての十分な考察を蓄積してきたとは言いが、そのなかにあって、諸発表が我々に提示するのは、フィールドの経験と向き合うことで、生活改善運動が何を变え、どのように人々を巻き込み、現在の我々の生活を規定してきたか、という従来重視されることのなかった、しかしまぎれもない我々の「生活」の立脚点の姿であった。そうであれば、現在の民俗学は、これから、揺らぎつつも立ち現れてきたこの概念で今、何をとらえようとしているのか。そのためには、どのようにこの概念を展開させてゆくことが必要なのか。それがいま問われている。

注

- 1 本稿は、日本民俗学会国際シンポジウム「何気ない日常/変わりゆく日常」第1部「対象—生活変化と生活改善」におけるコメントとして準備した原稿に、修正加筆したものである。
- 2 当時の中国語において「生理」は、職業に近い意味合いを持っていた。
- 3 シンポジウムの席上にて、発表者の一人である周星先生から、今日の中国語における「生活」に該当する語彙は「民生」であることを教示いただいた。ここに記して謝意を示したい。本稿で素描した中国における「生活」概念についてのより詳細な検討は、日本の影響、燕京大学のフィールド実験区の成果などを含め、当時の社会学的調査の文脈に位置づける形で考察することとし、別稿に譲る。
- 4 ここでは訳語が問題となるため、福武の訳書については当時のままとした。
- 5 シンポジウムのディスカッションの際に、フロアの伊藤重人先生より、「生活」の改善が指摘、実施される際、それが常に曖昧として正体を見せない立場から「人々」への一方的なまなざしとなってきた点をご指摘いただいた。ここに記して感謝申し上げますとともに、まさにこの問題は、近年の中国民俗学で議論が交わされている問題系、すなわち、「民俗」の「民」とは、誰を指してきたのか、という議論と直接結びつくことを付記したい。

参考文献

- 岩本通弥 2009 「生活」から「民俗」へ—日本における民衆運動と民俗学」東国大学校文化学術院日本学研究所(編)『日本学』第29輯、東国大学校文化学術院日本学研究所
- 岩本通弥 2011 「家族をめぐる二つの生活改善運動 民力涵養運動と新生活運動」田中宣一(編著)『暮らしの革命:戦後農村運動の生活改善運動と新生活運動』、農山漁村文化協会
- 閻明 2004 『一門学科與一個時代:社会学在中国』、清華大学出版社
- 許威漢・陳秋祥(主編) 2002 『漢字古今義合解字典』、上海世紀出版社
- 許少峰(主編) 1997 『近代漢語詞典』、團結出版社
- 吳文藻 1935(1990) 「西方社区研究的近今趨勢」『吳文藻人類学社会学研究文集』、民族出版社
- 高名凱・劉正燾 1958 『現代漢語外来詞研究』、文字改革出版社
- 田中宣一 2011 「生活改善諸活動について」『暮らしの革命:戦後農村運動の生活改善運動と新生活運動』、農山漁村文化協会
- 孟天培・Gamble, S. D. 1925・1926 「二十五来北京之物価工資及生活程度」李景漢訳(平野正雄訳、1942『北京に於ける二十五箇年(自1900年至1924年)の物価・工資・生活程度』)
- 李文海ほか(編) 2004 『民国時期社会調査叢編・城市(劳工)生活卷』、福建教育出版社
- 龍向洋 2010 『美国哈佛大学燕京図書館蔵民国時期図書総目』、広西師範大学出版社
- 林語堂 1937(1952) 『生活の発見』、創元社(阪本勝訳、1952『人生をいかに生きるか』上下、講談社)、(原著: Yutang, Lin "The Importance of Living", New York, John Day)
- H. Giles, 1892(1912 second ed), "A Chinese-English Dictionary", Revised & Enlarged, in Shanghai, London.
- K. Hemeling, 1916, "English-Chinese Dictionary of standard Chinese Spoken Language<官話> and Handbook of Translation", Shanghai: statistical department of the inspectorate general of customs.
- O.Z. Tsang, 1929, "A Complete Chinese-English Dictionary", Shanghai: The Republican Press.
- P. Poletti, 1905, "A Chinese and English Dictionary", Shanghai: the American Presbyterian Mission Press.
- S.D. Gamble, 1921, "Peking: A Social Survey", New York: George H. Doran.
- S.D. Gamble, (field work in charge of Wang Ho-Chen and Liang Jen-ho), 1933, "How Chinese families live in Peiping: a study of the income and expenditure of 283 Chinese families receiving from \$8 to \$550 silver per month", New York: Funk & Wagnalls. (福武直訳、1940『北京の支那家族生活』、生活出版社)

